

# 国際貿易論 2020 第4回 (6/4)

学生さんへ

- ・ ネット接続料金は大丈夫？
- ・ 夢の森公園はカキツバタ満開なう



## 先週のお話

先週は消費者の理論の中からオファーカーブという話をし、そのあと、生産者の理論に入り「まさかの合体」→生産可能性曲線といったあたりまで話をした。

## 今週のお話

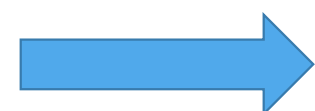
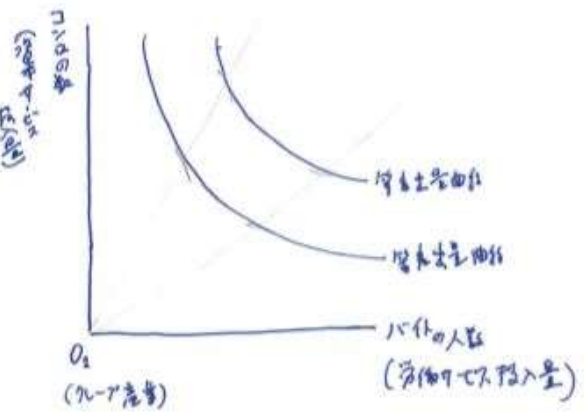
生産可能性曲線の話しの続き

アダムスミスの原理とは

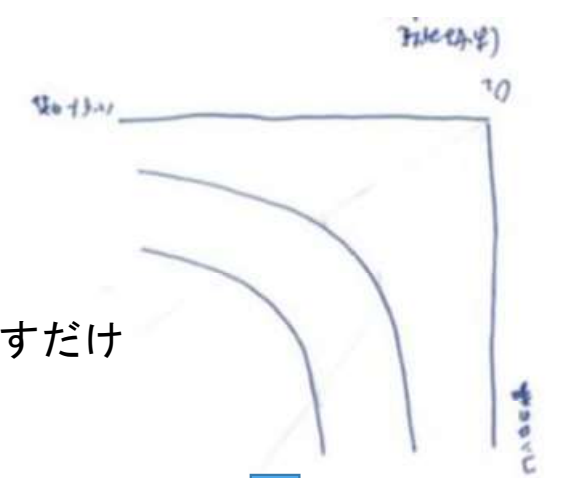
鎖国しているけど、自由主義市場経済の国がどのような状態に行き着くか（市場はどんな均衡状態になるか）

貿易の利益、という話しの一歩手前

「貿易の利益」 gains from trade とは



単にひっくり返すだけだゾ



まさかの？「合体」だゾ！

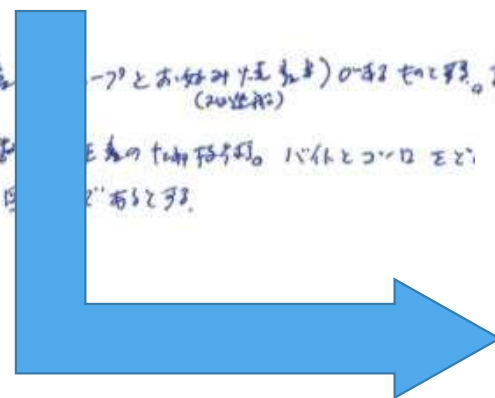


その国にある  
資本サービスの量

その国の労働サービス賦存量  
(=その国にある労働サービスの量)

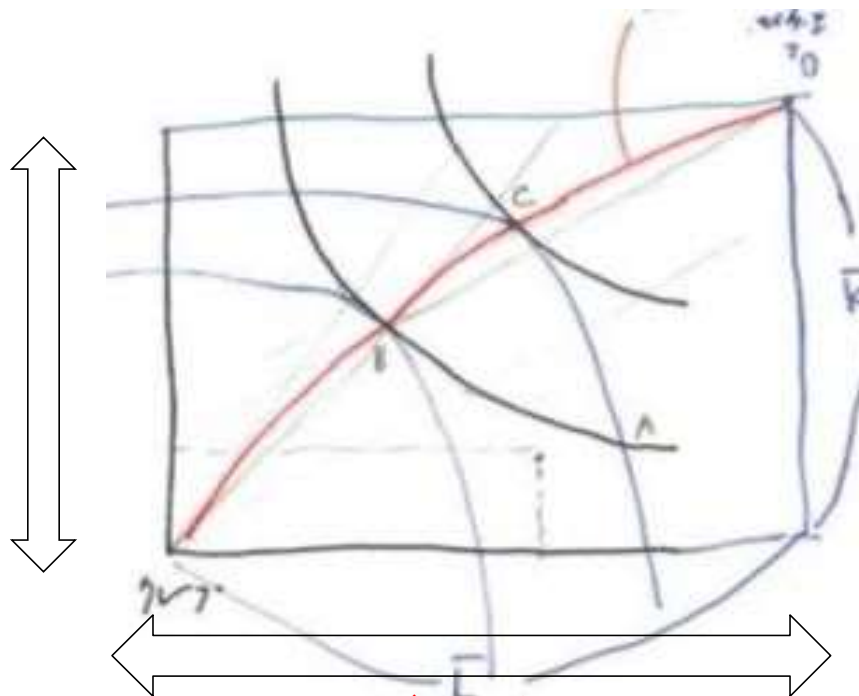
今、2つの国... (20世紀) ... 労働サービス... 資本サービス...  
 労働サービスは...  
 資本サービスは...

労働サービスは... 資本サービスは...  
 労働サービスは... 資本サービスは...  
 労働サービスは... 資本サービスは...



単にコピーするだけだゾ

その国にある  
資本サービスの量



その国の労働サービス賦存量  
(=その国にある労働サービスの量)

資本サービスも同様。資本サービスの源泉の資本ストックの持ち主は国民で、それぞれの産業（の企業）は資本サービスを（借り賃である利子率を払うから）売ってくれという。

企業（あるいは企業家）が持っているものはテクノロジーだけ。

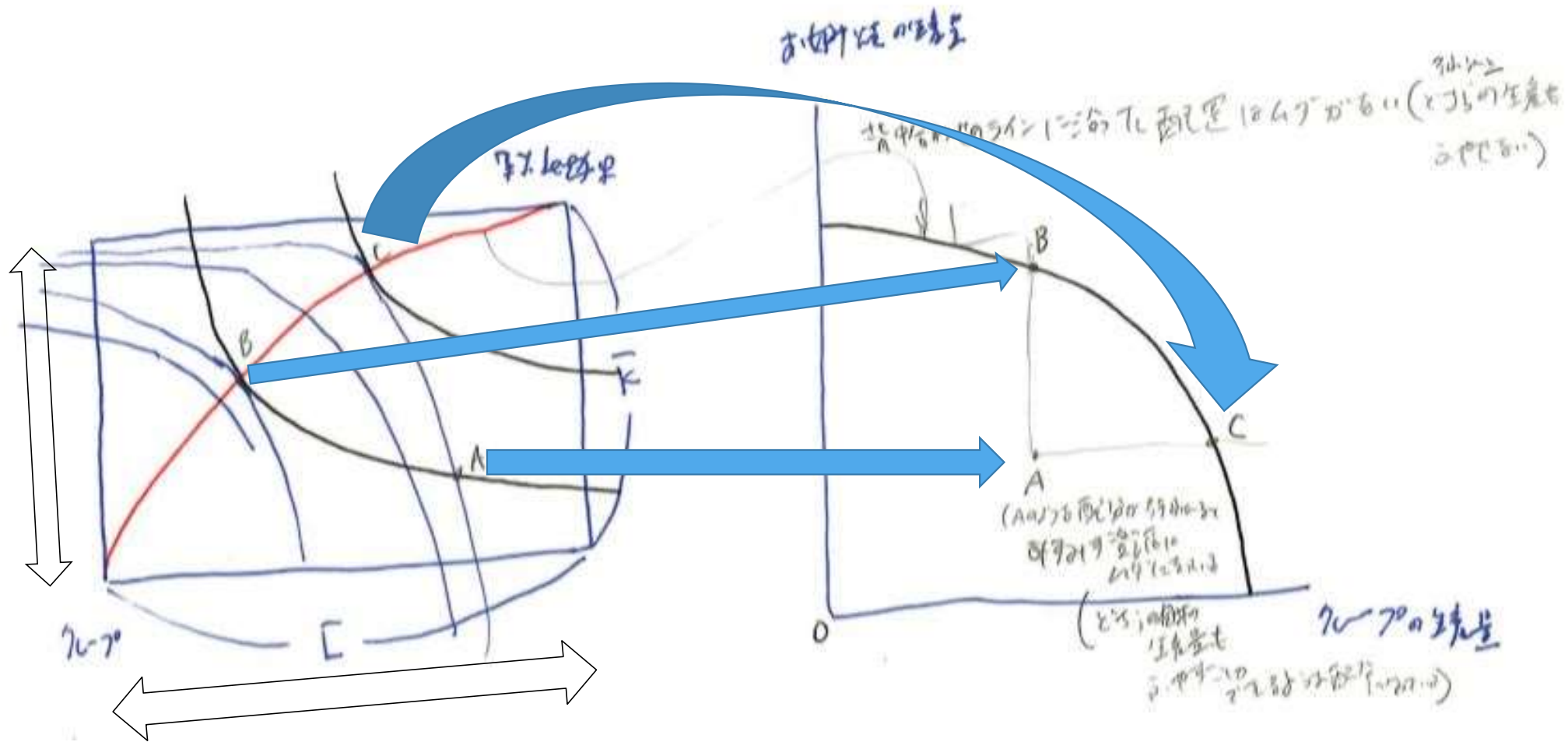
労働サービスと資本サービスは市場で、人々（つまり国民）から（サービスフローを）買い取ろう（レンタルしよう）とするのみ。どちらにも行ける。

合体図は、その国の資源の配分の行われ方（その全可能性）を示している！

その国の労働サービスは、持ち主は「国民（＝消費者）」。各産業（の企業）はそれを「雇用したい（＝賃金を払うのでサービスをウチに提供して（売って）下さい。買い取らせて下さい。）」とって、買おう（労働サービスを買おう）とする。なので

労働サービスはとりあえずどちらの産業にどれだけ行くか（おたくで働いてあげましょうと言うか）は分からない（どちらにでも、行ける）。

その国にある  
資本サービスの量



その国の労働サービス賦存量  
(=その国にある労働サービスの量)

で、その国（というかある国、というか、今何となく頭に思い描いている、当該の妄想の中の国）では資源はどのように配分され、生産可能性曲線上のどこの点が生産されることになるか？

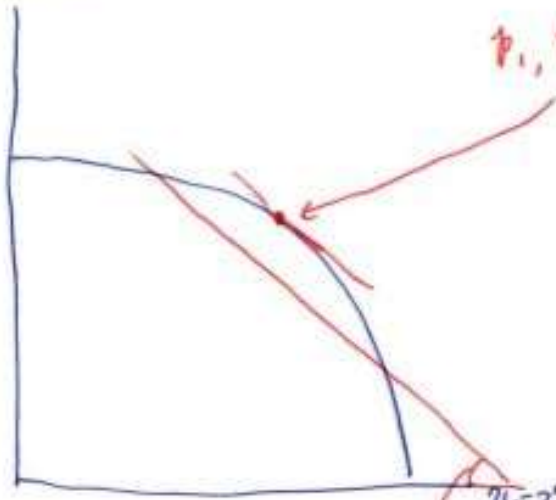
アダムスミスの原理

生産可能性曲線 とう

アダムスミスの原理

(競争的)市場経済(市場)の下では、生産可能性曲線上のどの点か生産される(生産)という問題!

市場



$P_1, P_2$  - 5 財の価格

GDP =  $(P_1 \cdot Q_1 + P_2 \cdot Q_2) / (P_1 \cdot Q_1 + P_2 \cdot Q_2)$

一番大きくなる点

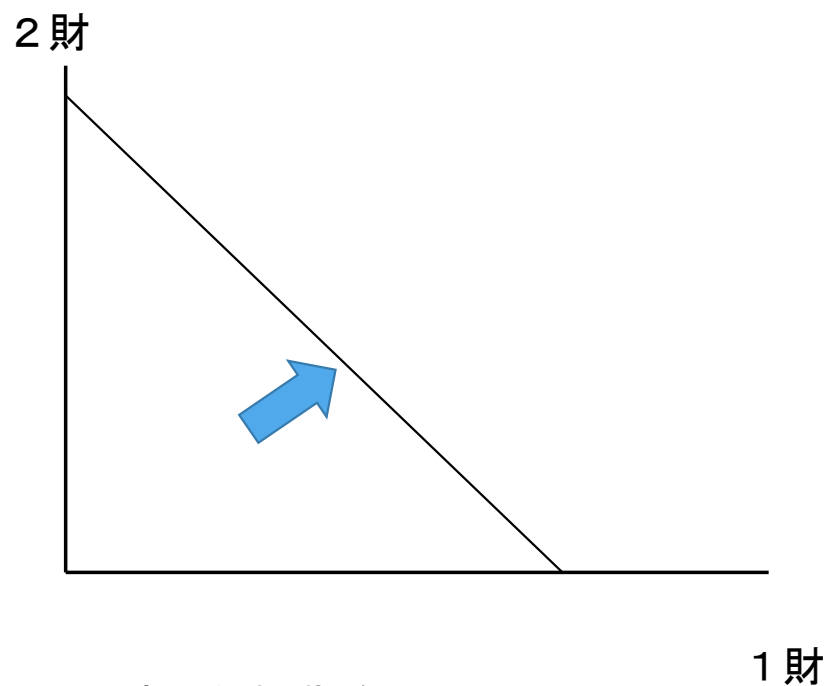
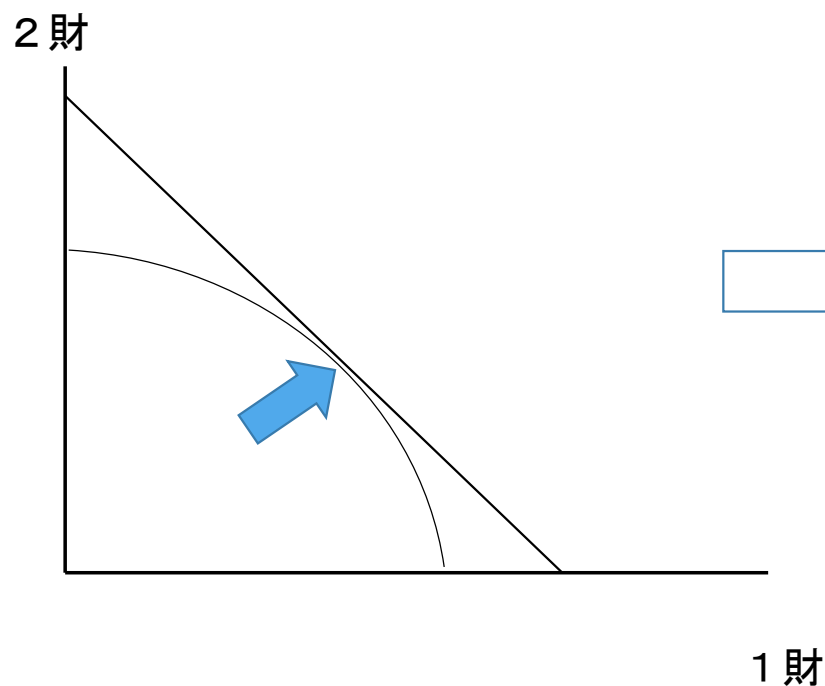
生産される

アダムスミスの原理

生産される  
一番大きくなる点

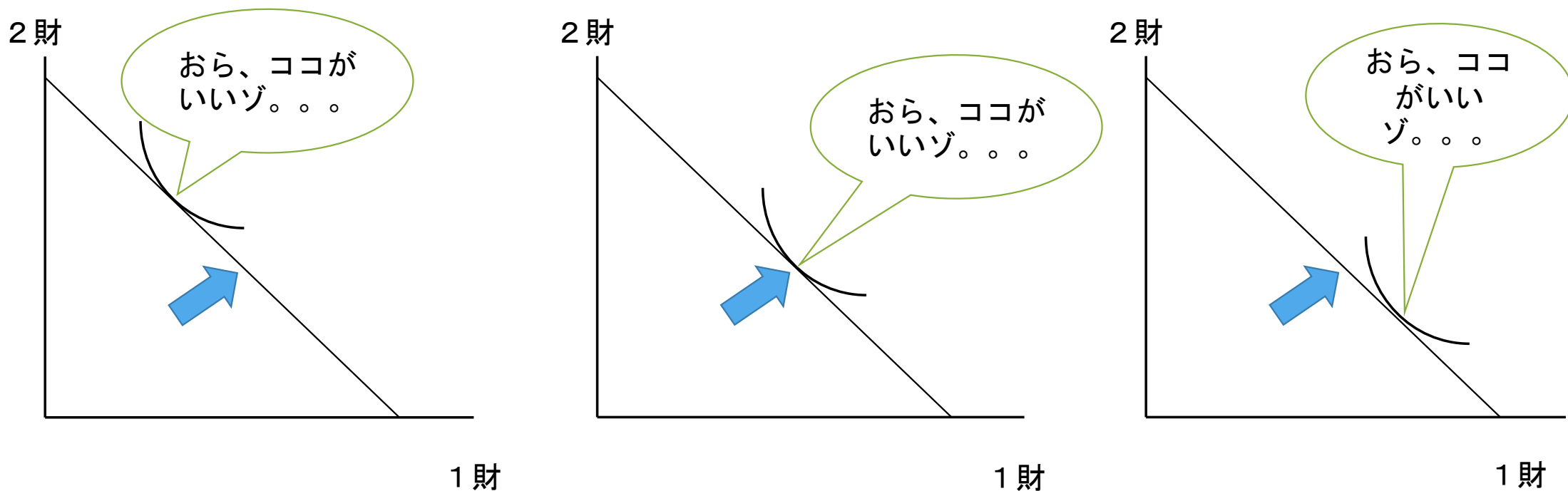
$P_1, p_2$  (1財と2財の価格) が与えられたとして  
その国では (競争的な市場社会である、その国では)  
GDP額が一番大きくなるような点が生産される (よう資源も配分されることになる)。

ところで、アダムスミスの原理によって、下の図の点が生産されることに（とりあえず）  
なったとして、このとき、（鎖国している）この国の国民（＝消費者）は、「自分たち国民に  
とって買うことのできる範囲」つまり「予算集合」はどのようなもの、と感ずるであろうか？




生産可能性曲線を消した  
だけ、ですが・・・実はこの  
三角形こそ、国民にとっては「買うこと  
のできる範囲でしょ？」と感ずる「範囲」

そうすると 可能性としては次の3つが起こりえる。



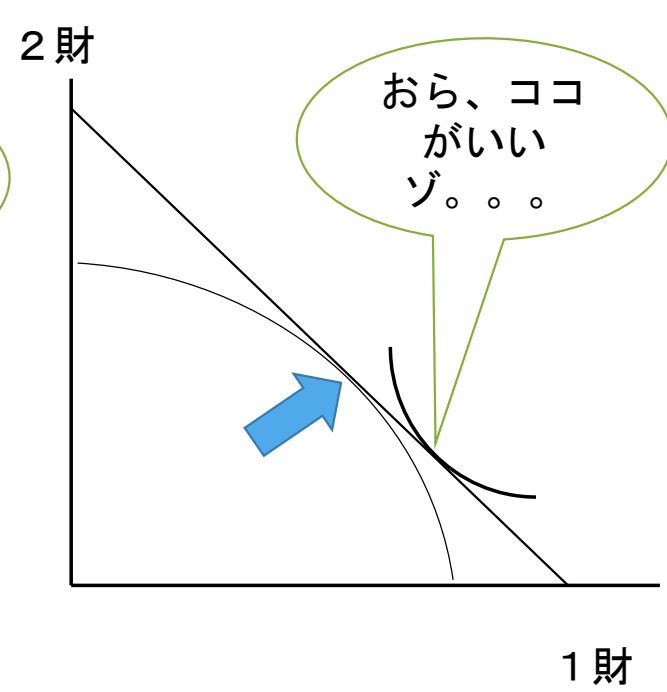
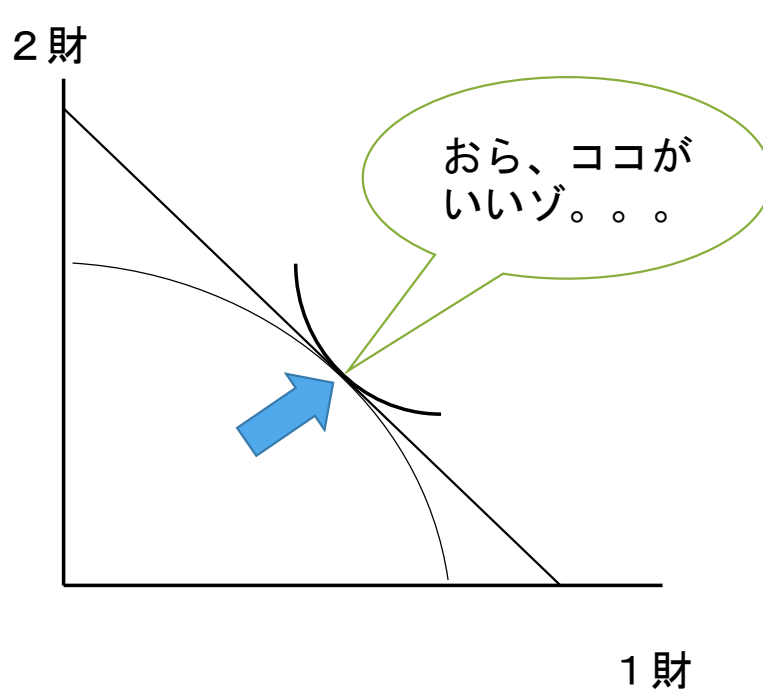
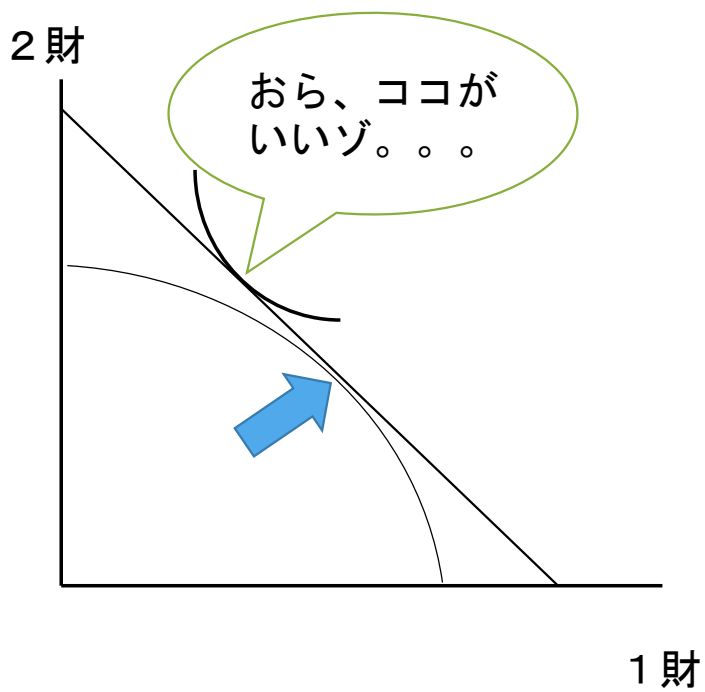
消費者は労働サービスと資本サービスを市場を通して各産業（の企業）に提供したかもしれない。しかしそれ以上のこと（例えば、各産業はどれだけずつ作ったのか、ということ）は彼ら消費者は知らない。なので、青矢印の先と「おら、ココがいいゾ」という点は、何もなければ食い違って当然。

＝青矢印の先がどこにあるのか

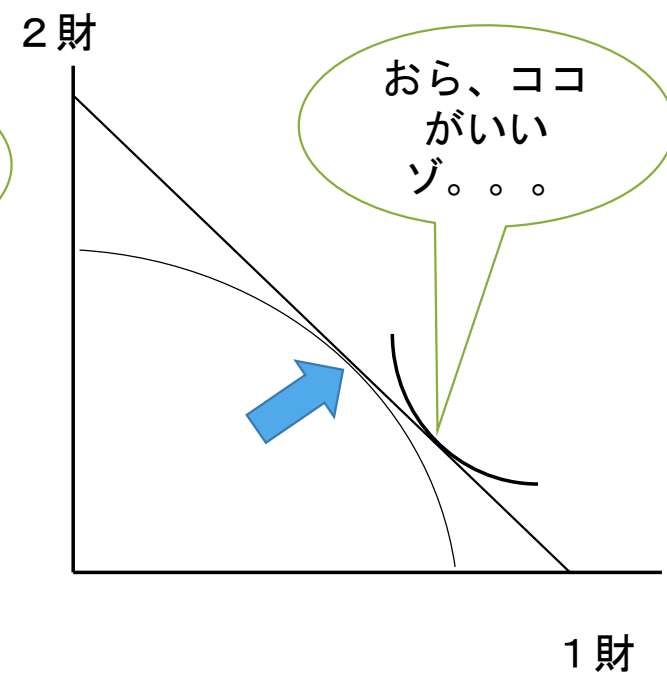
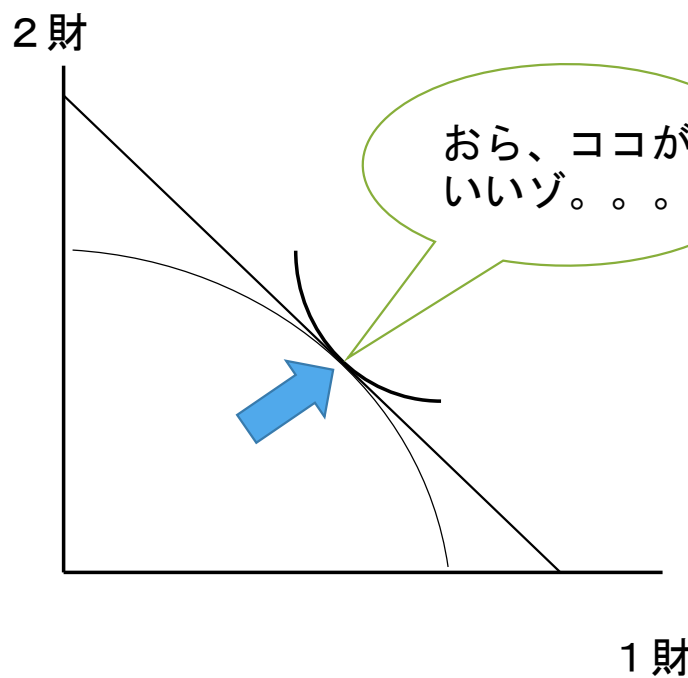
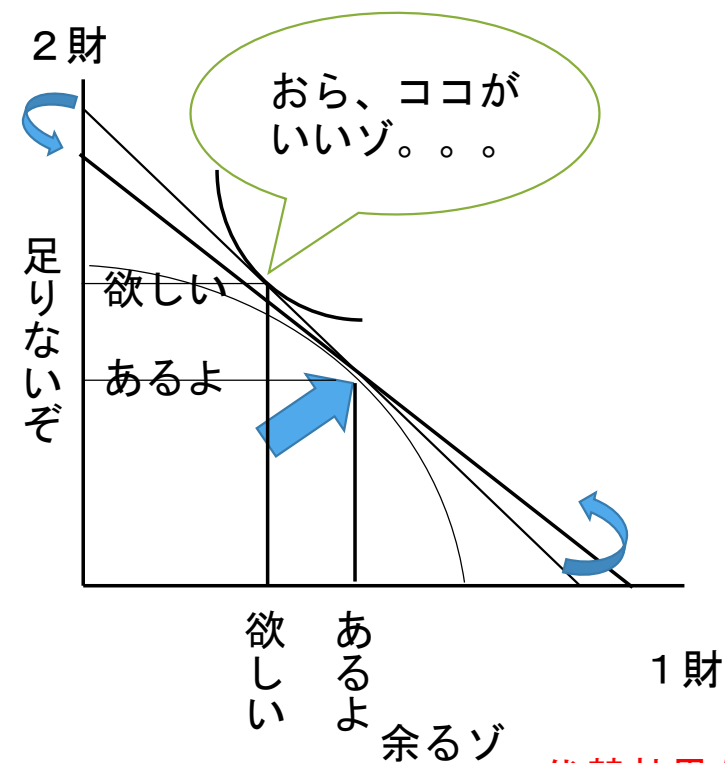




生産可能性曲線を入れ直した・・・



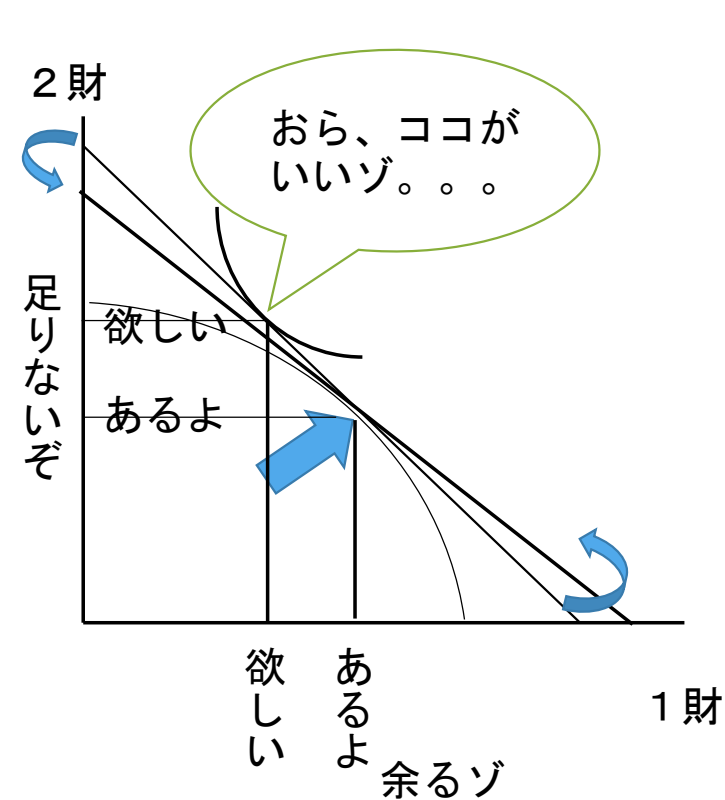
そうすると、左の場合は



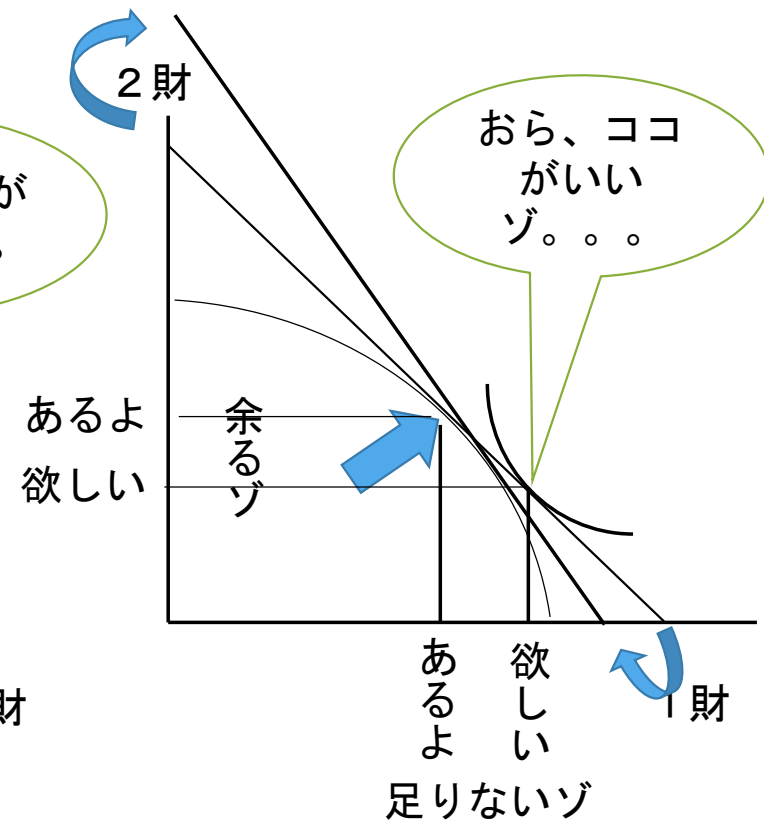
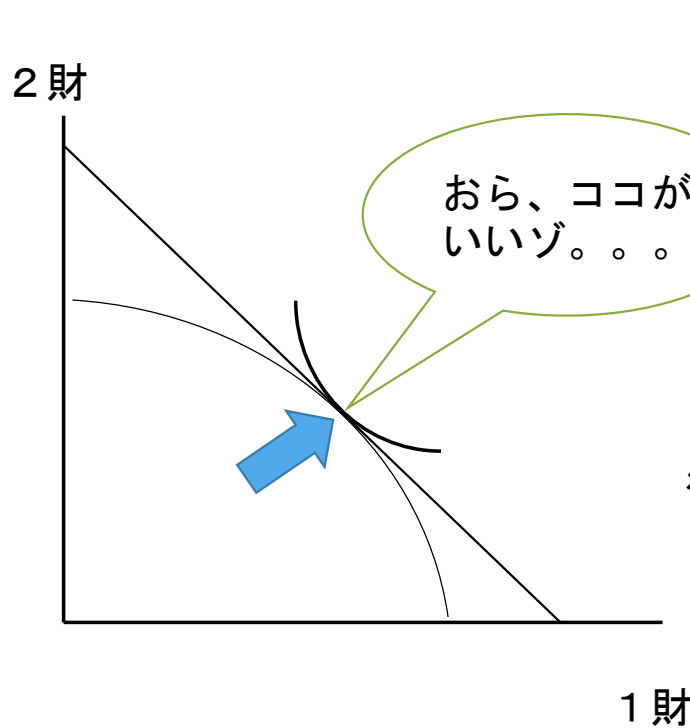
1財は「値下がり」  
2財は「値上がり」する

代替効果が働いて  
1財の需要アップ  
2財の需要ダウン

右の場合は

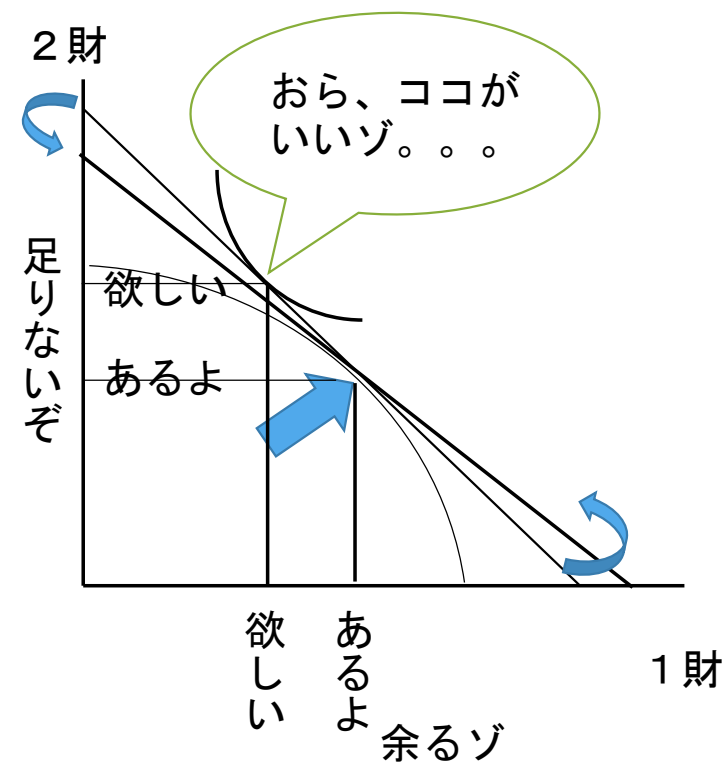


1財は「値下がり」  
2財は「値上がり」する



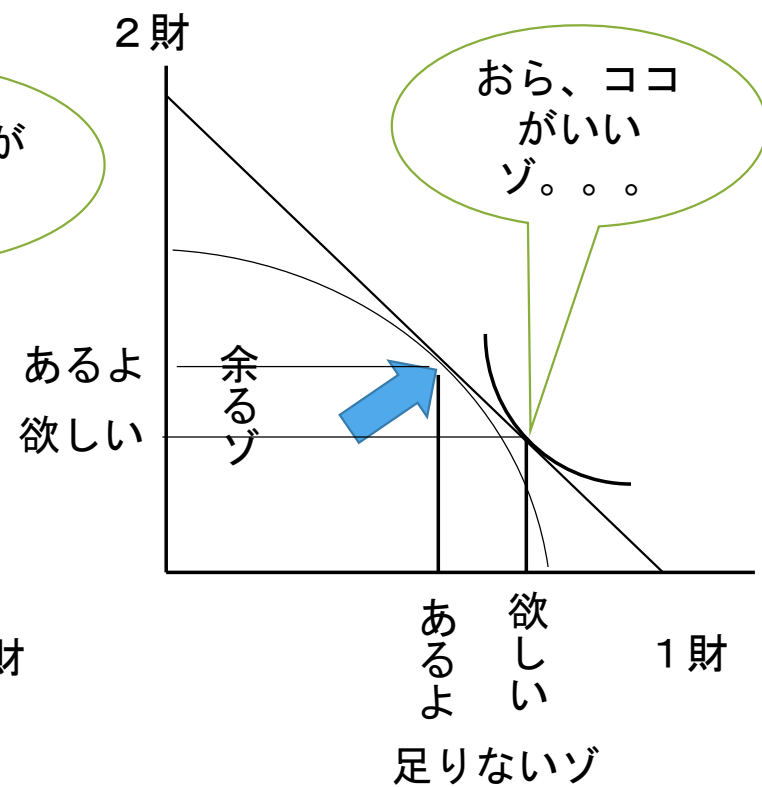
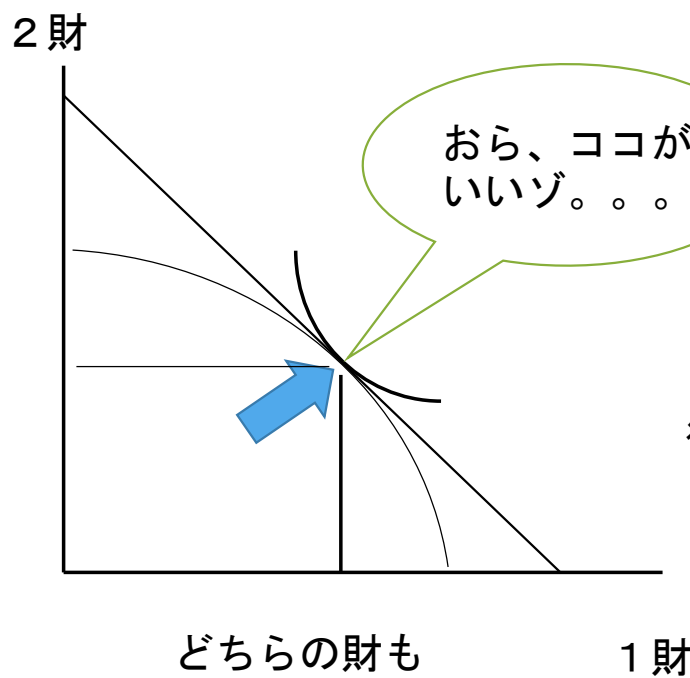
1財は値上がり 代替効果が働いて  
2財は値崩れする 2財の需要アップ

真ん中の場合は



1財は値崩れ  
2財は値上がりする

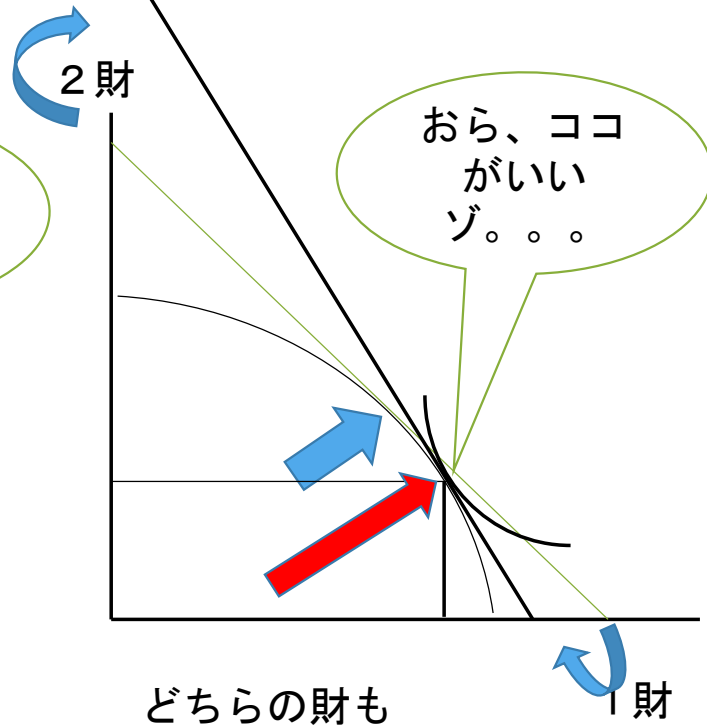
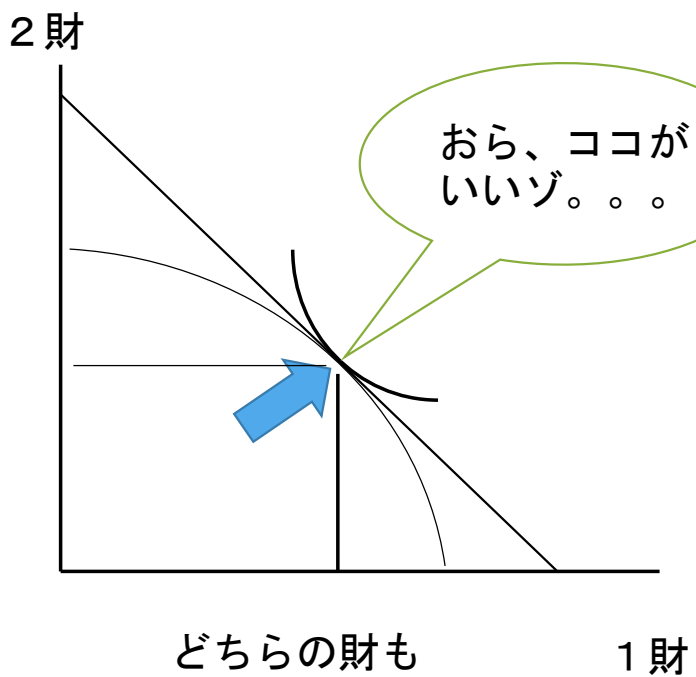
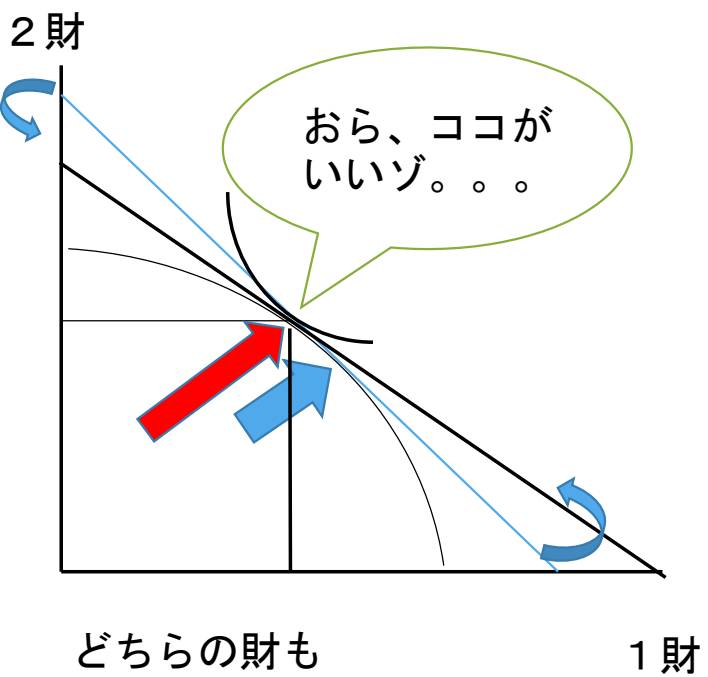
代替効果が働いて  
1財の需要アップ  
2財の需要ダウン



1財は値上がり 代替効果が働いて  
2財は値崩れする 2財の需要アップ

鎖国している（けど、自由主義市場経済体制で、市場が競争的である）国では  
以下のような状態が（市場を通じて）生じる。

これが、市場均衡（市場の作用を通じて生じてくる資源配分の状態、つまり  
どれだけ作られ消費され、価格はどのようになるか、ということが、市場での作用を  
通して行き着く先）の状態



どちらの財も  
ちょうどよいゾ  
(足りなく無いし、  
あまりもしない)

どちらの財も  
ちょうどよいゾ  
(足りなく無いし、  
あまりもしない)

どちらの財も  
ちょうどよいゾ  
(足りなく無いし、  
あまりもしない)

鎖国しているけど、自由主義市場経済体制の国、では市場でのやりとりのプロセス（アダムスミスの原理の背後にある企業の活動、および消費者の「おら、だったらここがいいゾ」の繰り返し）を経て「どこに行きつくか」が示された（分かった）。

## 「貿易の利益」という話

この話（鎖国している国ではどこに行きつくか。どこまで行けるか）が分かったところで、初めてそこに

「貿易を開始してみたら、さらにどうなるか？」

という

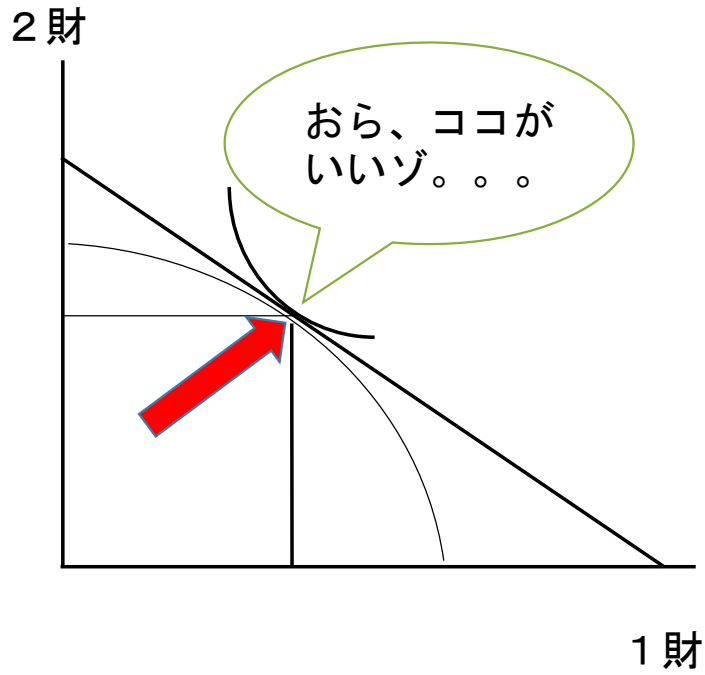
「貿易がもたらす恩恵や影響」つまり「貿易の利益」というものを知ることができる。

つまりはここまでの話は「貿易の利益」という話を理解するための「前段の話し」（長い長い前座話し）。

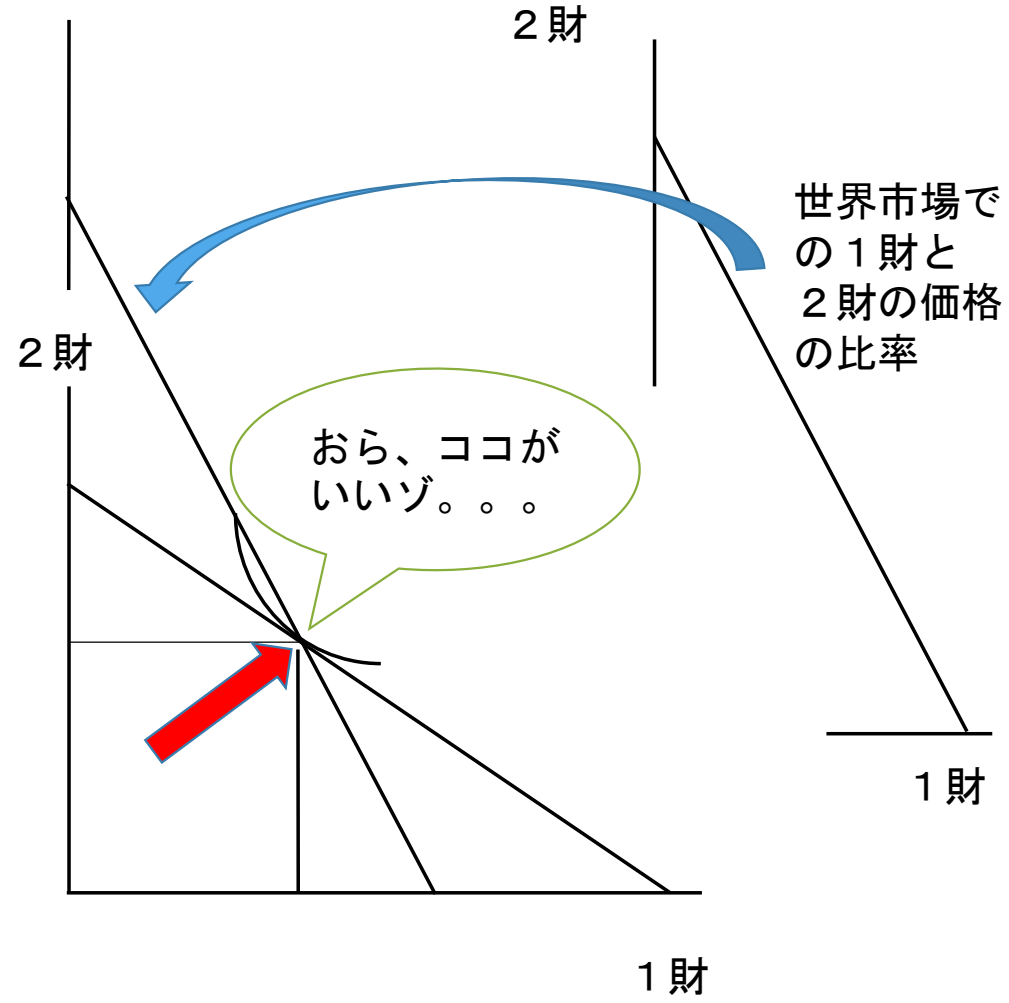
国際貿易論の授業は、大変だ。。。

# 貿易の利益

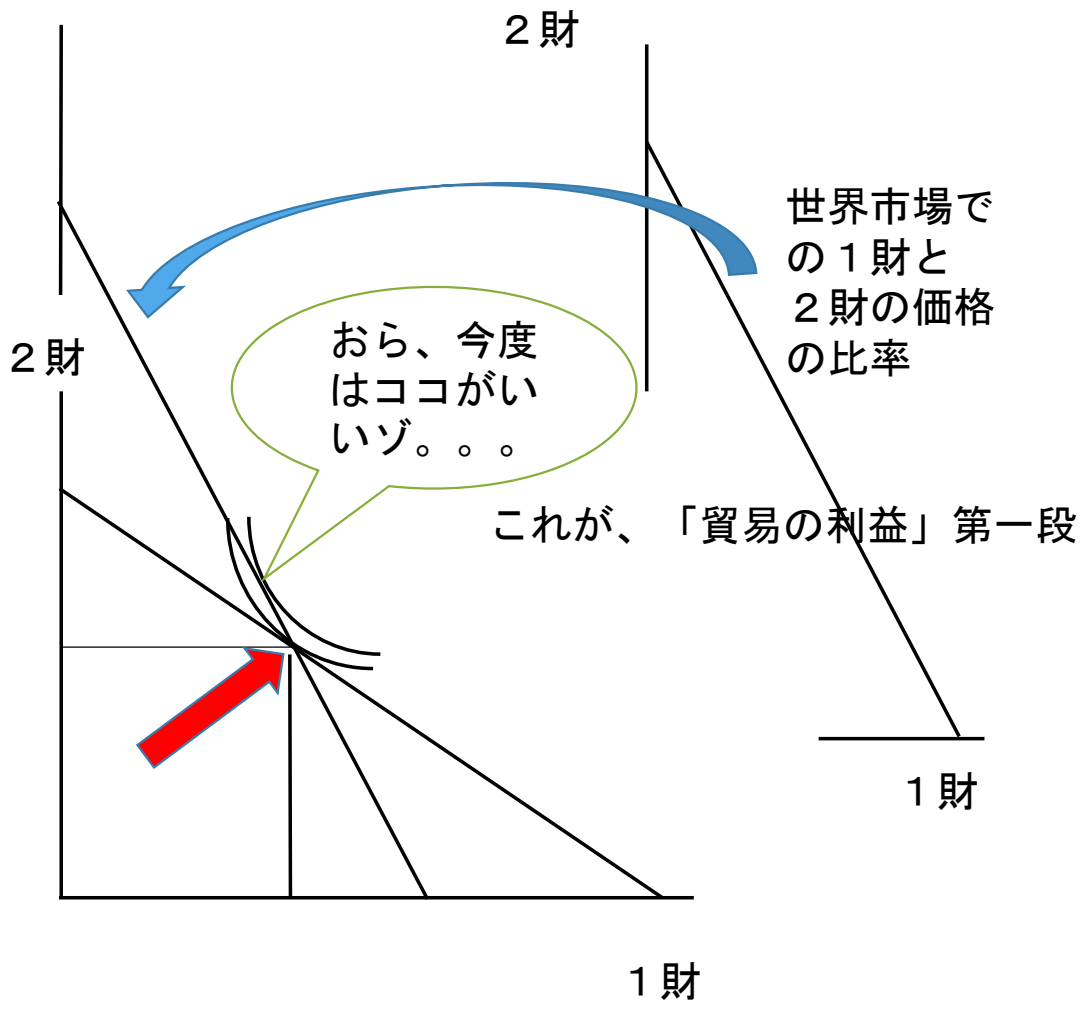
3つ並んでいた図のうち、左側にあった図のようになつたとしよう。



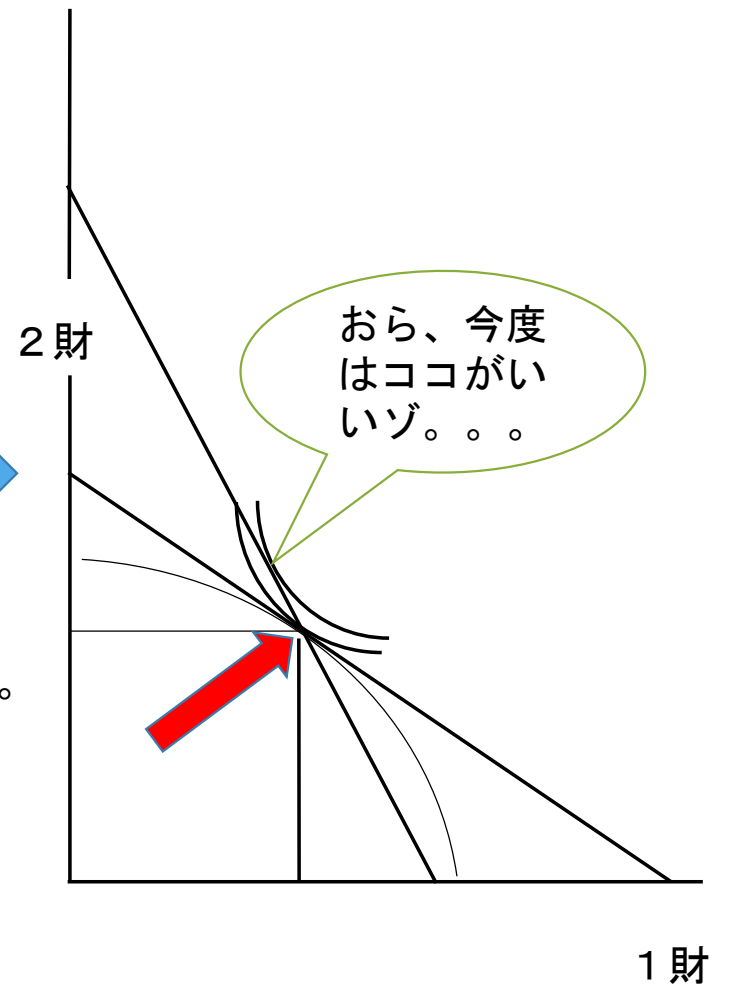
生産可能性曲線を消してみた



ここにペリーがやってきて貿易を迫ったとする。

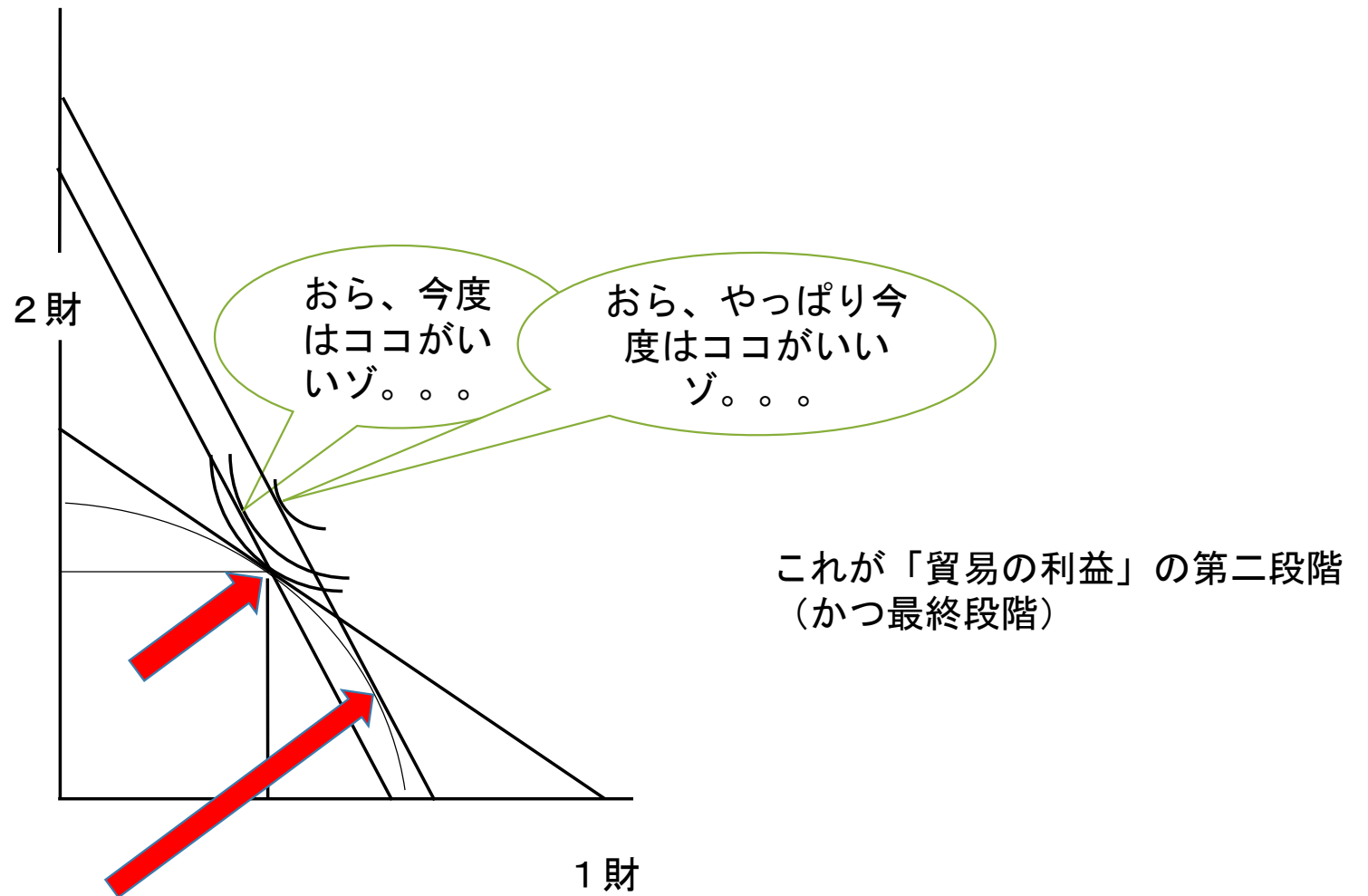


生産可能性曲線をもう一回書き込んでみた。



ペリーに迫られて貿易を始めたために「世界市場」で売ったり買ったりできるようになった。





アダムスミスの原理で生産点がここに移る！